

第十九回「公德文芸賞」入賞作品

【俳句部門】

最優秀賞

友人と息の白さを見つめ合い

城北3年 松本 りん

【評】ふとした映画の静止画面のような物語的面白さがある。何でもない高校生活のひとこまだが、元気で慌しい日常の一瞬立ち止まって我（われ）に返るところが良い。「息の白さ」が俳句的で、「見つめ合い」に物語がある。（岩岡）

優秀賞

蕎麦の花好きなドラマを思い出す

球磨中央3年 入口 鈴

【評】真白の花が広々とひろがる大地に青い空。蕎麦の花の純白が、いかにも青春の物語にふさわしい。（岩岡）

梅雨晴の朝空腹にチャーハン

北稜2年 西田 凜果

【評】久しぶりの梅雨晴の明るい朝。さあこれからという意気ごみに、朝からチャーハン。いかにも健康的な一句である。（岩岡）

イカ焼きが好きだと言えぬ夏祭り

球磨中央3年 柿下 羽純

【評】デートの様子。りんご飴よりイカ焼きとは言えない、付き合い始めて間もない頃の女の子の気持ちが現されている。うまい！とうなった作品。（西口）

裏切りとアネモネ咲（わら）う最終話

済々黌3年 上田 華衣

【評】アネモネの花の可憐（かれん）さに潜む闇の世界を感受性豊かに詠んだ。物語の最終話は裏切り。え？まさか…。そんな気持ちとアネモネの花の風情が合う。（西口）

醤油かけひと息とめる冷奴

第二1年 林田 理史

【評】夏の食卓の定番、冷奴。その美しい白に醤油をかける一瞬の罪悪感。少し遅れてやってくる、美味しそう！の気持ち。確かにひと息とめてます。（西口）

入選

夕立がやむまで少し話そうよ

熊本1年 永松 凜歩子

蟬時雨足がはりつく登下校
汗流しサーブレシーブていねいに
日盛りに水鉢が泣く墓参り
弟と双子のように並ぶ夏

第二1年 甲斐 瑞萌
玉名工2年 松石 涼
熊本1年 橋本 実優
文徳2年 山下 貴弘

努力賞

純白の入道雲と我が心
木を蹴って蟬をおどかす男の子
妹が蟬の抜け殻ばらばらに
思いつきを忘れぬうちにつづる春
夏ソング憧ればかりせつないよ
向日葵と顔を並べて仰ぐ未来
頭上行くノスリが残暑吹き飛ばす
夏休み家には私と猫一匹
海に浮く僕の心は入道雲
最終日自分をうらむ夏休み

玉名工1年 遠山 蒼空
第二1年 大石 歩夢
第二1年 葦田 悠真
城北1年 平野 俊丸
熊本商2年 白木 彩音
熊本2年 松森 美咲
熊本1年 壁谷 成喜
熊本商2年 宮山 空澄
第二1年 水上 光陽
第二1年 小西 萌友

【総評】全体として、いわば夏休みの課題としてつくった印象の、もう一つと思える句もあったが、今回選ばれた句はどれも、高校生の生き生きとした生活実感のある句や想像力豊かな句ばかりである。

全体の印象の第一点は、豊かな想像力から生まれるドラマ性。やはり映像時代の若者らしく映像化が得意で、これは俳句づくりには有利。これを通して物語（ドラマ）をどう短い詩語（俳句）に変えるか、短い俳句からどう映像や物語を展開するか、この若者の世界を少し垣間見た気がする。

第二の印象は、やはり若い生活者としての高校生の感覚の楽しさ。今回上位にはからずも食物を素材にした句もあったように、素朴な生活実感から日々の暮らしが垣間見られる句が楽しかった。

俳句の技巧などの見た目は競わなくていい。日々ふともらした小さな感動こそ大事。今回の俳句の応募や入賞・入選をきっかけに、日記やノートの隅に俳句や俳句の断片をメモして、続けてほしい。（岩岡中正）

3046句の応募の中から選ぶ作業はたいへん、というよりも面白い。会ったことのない高校生の姿を思い浮かべながら「高校生の今」だからこそ詠める俳句を選んだ。季重なりになっているものもあったが、「今」を真っすぐに詠むためにそれはどうしても必要であったというのならそれもいいではないか！という思いで選考した句もある。

夏の課題だからか、これでもかというほど宿題に追われる句が数を占めていた。高校生は忙しい。だが、高校生（あなた）を取り巻く世界は、そんなに狭くは

ないはずでは？ もっともっと全身で各々(おのおの)の「今」を感じてほしい。そして、自分の言葉でその思いを発してほしい。学校は忙しい。しかし、生徒のすぐそばにいる大人たちにはできる限り彼らの心を耕す手伝いをしていただきたい。自ら種を蒔(ま)く術(すべ)を知らない生徒たちの掌(てのひら)に一粒の種を置く。それが、きっと未来の豊かな日々につながるものと信じている。(西口裕美子)

【短歌部門】

最優秀賞

検定の始まり合図に電卓の音響き渡り緊張高まる

熊本商2年 久我 彩葉

【評】試験開始の一瞬のさまが鮮やかに活写され、一心に問題と取り組む姿が見事に映じてくる。電卓操作のスキルを測る検定試験、「電卓の音響き渡り」に教室の静寂をやぶる具体的イメージが立ち現れ、若さの持つ力強い躍動性が十分に想像できる。ますますの精進を願いたくなる。

優秀賞

手鏡の中に閉じ込め見つめたい本物の私偽物の私

濟々鬢2年 翟 怡

【評】少女らしい悩みを手鏡を手段にして確かめようとしている。今、鏡に映っている自分は本当の自分なのだろうか、それとも見せかけの自分なのだろうかと。「手鏡の中に閉じ込める」という発想がユニークであると同時に深い思索を表現していて素晴らしい。

鬼灯のごとき紅い灯つりさげて闇の湖上に揺る屋形船

第二3年 松本 莉沙

【評】おそらく江津湖に浮かぶ夜景なのだろう。「鬼灯のごとき紅い灯」という比喩が実感的で巧み。闇の中に浮かぶ「紅い灯」が、結句の「屋形船」の体言止めと相俟って一光景をくつきりと印象付ける効果を發揮している。

山行くと鳴り響くのはチェーンソー山を感じるその音聞くと

芦北3年 井上 彩斗

【評】短歌は個人的な体験が色濃く反映する詩型でもある。その意味で、「チェーンソー」を身近に感じている作者なのであろう。「山行くと」「山を感じる」感覚は、林業へのあこがれにも似たものを掬い上げており、共感を覚える。邪気がなく、澄み切っていて、しかも明るく、心地良い。

落ちこんで不安な気持ち紛らわし白杖のリズム気分高める

盲学校2年 佐々木 旺広

【評】落ち込んだ気分を紛らわそうと白杖で地面をたたくリズムを早くしてみたいという歌である。目の不自由な人にしかできない技だが、そのことによって、気分が高まったという効果があったのだ。

夜に灯るほのかな光見上げれば雲からのぞく月と目が合う

第二1年 白石 実怜

【評】明るい夜だと思つて空を見上げたら雲から顔を出したお月様と目が合った。それだけの事だが、月とそれを見ている自分という、関係性の中に自然への憧憬が込められている。

入選

コロナ禍でどこへ行つてもディスプレイスだけど心はいつも近くに

熊本商2年 野仲 優羽

草取りでふつと顔あげた目の前に運動場が広がった

荒尾支援1年 川田 雄士

アラームが役に立たない我の朝の効果あるのは母の声のみ

マリスト2年 北野 愛子

前髪の形を整え外に出るそれを無視する強き風かな

菊池女子1年 黒川 愛加

君がもう忘れてしまった約束をわたしは今でも思い出せるのに

人吉2年 市花 あこ

努力賞

『頃合いがいい』と君が言ったから七月七日はサラバ記念日

第二1年 金森 晴世

雨上がり日に照らされる葉の雫あじさいの花いきいきと咲く

菊池女子2年 下田 由奈

終わりがかと思えば次は第七波そろそろ終われこの波止まれ

文徳2年 渡邊 敬士

金木犀咲いたばかりの花摘んで初の挑戦香水作り

球磨中央3年 藤山 莉々

お仕事で疲れきつてる母のため嫌いな洗濯今日は私が

玉名工2年 平田 莉織

天草のイルカ見るため船に乗り挨拶きこえた「キューッ」とね

城北1年 濱崎 光琉

夕刻に沈みゆく日を見てみればこの刻の空はどこか虚しき

球磨工1年 迫田 和真

帰り道オレンジの空ひこうき雲悩みなんかは忘れたその時

マリスト2年 吉永 蒼悟

秋の日の光差し込む夕暮れにあなたの声がとどく幸せ

城北1年 大塚 涼桜

向日葵とどっちが高い背比べやはり毎年私の負けだ

熊本商2年 中嶋 凜

【総評】今年も高校生らしい、そして多様な作品が応募された。最優秀賞の作品は、教室での緊張の瞬間を見事に切り取った緊迫感のある作品だった。優秀賞の作品も、少女らしい悩みを手鏡を題材にした歌や、普段つかっている白杖を素材にして日常生活を表現した情感豊かな作品が少なくなかった。

今年はそれに加えて、短歌本来の叙景歌と呼ばれる風景を詠んだ作品が増えたことである。月や夜の湖、山の中の音などを高校生らしい視点で捉えた秀作が目立った。また俵万智の「サラダ記念日」をもじった作品が出現するなど、短歌に関する知識の高まりも感じられた。

ただ、コロナ禍に関する作品はあったもののウクライナ侵攻を詠んだり、元首相の暗殺(旧統一教会の問題)など、社会的な事象に関する作品が見られなかったのは少し残念だった。これらの出来事については連日のようにメディアでも取り上げられ、高校生の目にも止まっていたはずである。風景詠に加え、社会詠が出てくることを願うものである。(橋元俊樹)

応募が前年よりも少し減ったが、それでも700首近い作品を拝見し、若さが持つ固有の感覚と心情にしばしば若き日のわが姿と重ね合わせたことである。コロナ禍3年の今日、あたり前だったことも自由におこなうのが制限される状況にあつて、高校生活もやや窮屈であることが素材の面から窺うことができた。一日も早く普段の行事等が出来る、コロナの終息を願うばかりだが、そんななかで、若々しい歌、感受性に富む歌、自身の内面を見つめる歌などに出合うことができたのは幸いであった。

今回は20回の節目を迎える。来年の応募作品が今から楽しみである。(塚本諄)

【自由詩部門】

最優秀賞

「空っぽのガラス瓶」

ガラス玉がコロコロと転がって、瓶の中に小さな小さな風鈴が宿った。私の焦がれた胸が影になって、目の前で背伸びする。このガラス玉が瓶の口を塞いでしまったみたいに、もどかしくなって。でも、ここで泣いたって、蟬が邪魔するからどうせ君には聞こえないんだよ。きつと、この涙はラムネみたいな味がする。微炭酸がしゅわしゅわと喉を潤して、思わず一つ咳払いをした。ふっと生温い夏風が私を包んで、頬がお日様色に染まる。この浮き沈みを繰り返す泡みたいに、淡く墓無い記憶が蘇って。でも、私の本当の音はあの雲の向こうにあって、君もそこまでは追いかけてくれないよね。きつと、この思いはラムネみたいな味がする。瓶も日陰に腰掛けて、水滴が私の足元を濡らした。まるで味がしなくて、気が抜けたのかな。なんて考えた。早くこの勘定を売買したい。値も上がらないだろうけど。でも、君の笑顔で胸が弾けそうになっちゃうから、嗚呼きつと、この夏は――。

熊本商2年 赤星 菜比呂

【評】言葉の感覚とリズム感が際立った作品です。テーマの目新しさはないのに、読むものを引きつけます。この詩を通り一遍の恋歌から隔てているのは「私の本当の音は…」の連です。「心」ではなく「音」という表現が謎めいていて秀逸です。

優秀賞

「こきゅう」

人の「こきゅう」は命の源。
犬の「こきゅう」も命の源
草の「こきゅう」も、虫の「こきゅう」も全てが命の源。
「こきゅう」は全ての生命に「生」を与える。
地球は「こきゅう」をする。
人や犬や草や虫と同じように「こきゅう」する。
人や犬や草に比べてよりゆっくり鼓動を奏でる。
地球に住む生命はその美しい命の源を「災害」と呼ぶ。

そこに住む者達は居候の分際で地球の生命活動を悪とみなす。地球の「こきゅう」は神が怒り、起こしたわけではない。ましてや「住む者達」によって止めることはできない。地球は46億年前からずっと「こきゅう」をし続けてきた。居候が自分の体に増え続けることを暖かく見守ってきた。自分の体にどれだけ穴をあけられてもずっとたえ続けた。もし「住む者達」に地球が怒っても、それはしかたないのだ。地球にとってみれば我々居候は体をむしばむ害悪にすぎない。普通なら今すぐにも害悪にいらなくなつてほしいと思うはずだ。それでも地球は見守り続ける。痛みを耐えながら見守り続ける。そのことを知らぬ「人間」は今や地球を見捨てつつある。地球に生かされていることも知らずに。なぜ地球が害悪を滅せず今まで生かしているのか。なぜ自分の身を傷つけてまで我々を見守り続けるのか。それは我々害悪が地球にとって我が子同然であるからだ。つまり我々にとって地球は「母」同然なのである。見守る母。見捨てる子。子は情けを知らず、母はどこまでも子を信じ続ける。今も「こきゅう」は続く。どちらかが滅びようとも。

人吉1年 川原 亮太

【評】誰もが実感できる「こきゅう」を通して地球と人間の関係まで広げて思索しています。スケールが大きく深みがある作品です。後半にもっと工夫があれば一段といい作品になる気がします。

「私の夏」

このまま大きく踏み出して
黄色い線を飛び越えようと
車輪に身体が吸い込まれ
刻まれてバラバラに

私は ただの赤い肉片と化す

このまま大きく踏み出して
白い線を飛び越えようと
ボンネットに弾かれた身体は
固いコンクリートに

私は ただの赤い人形と化す

茹るような暑さの中で

私の思考は目の前にあるであろう
“死”に支配される。

眩しい太陽が

全てを見透かすように

私を照らし

影を濃く落とすから

重い空気が

まるで地に沈めるように

肺を満たし

ゆっくりと引っ張るから

私の夏は哀しみに満ちていて

光はとても遠く感じる

なぜだか無性に泣きたくなって

息苦しくて

寂しい

鎮西3年 櫻木 寧々

【評】作者は切実に死と向きあっています。それはとてもリアルで青春に誰もが通り過ぎる危うさとは異質の次元かもしれませんが、でも、こういう感情を言葉にできるときは再生と出発の時でもあるのです。

「霽月」

わたしは夢をみるのです

東雲の空 かはたれに

あなたはうつすら微笑んで

わたしをみつめているのです

わたしは夢をみるのです

白日の空 日の辻に

あなたはひらひら手を振って

わたしをながめているのです

わたしは夢をみるのです

落陽のそら たそかれに

夜のとばりが降りてきて
あなたをかくしてしまうのです

わたしは夢をみたのです
星合の空 うしみつに
かささぎの橋を渡っても
ぼつんとうかぶ 夏の夜の月

濟々鬢2年 西 紋也乃

【評】日本語の美しさが際立つ作品です。「かはたれ」も「たそかれ」もあなたを暗示して優れた表現として効果的です。古きを知ることが新しさに通じることを改めて感じます。

「ツルネ」

ツルネ。

ツルネとは矢を發したときに弦で弓を打つことで
鳴るといわれる音。

天候や射手の心理状態の影響を受けやすく
同一人物が同じ弓を使ってもいつも同じ音がする
とは限らないのがツルネだ。

つまり、10人いたら10通りのツルネがあり
そのなかでも何通りのツルネがあるのだ。

弓を引いているとツルネで今のが良かったか悪かったかを
判断することもある。

綺麗なツルネ

汚いツルネ

その人の射で全て決まる。

でも、ツルネは自分では聞こえない
聞こえるのは矢が

的に

土に

ささる音。

みんなものすごく緊迫し集中した精神状態
でやってるからだ。

ツルネ

それは一人一人特別な音を持っている。
でも、そこに注目している人は少い

ツルネ

それは今も弓道場内に綺麗な音を
響かせる。

熊本商2年 服部 友貴

【評】「ツルネ」という言葉を初めて知りました。ツルネが射手には聞こえない
というのは暗示的です。その人の本当の良さとは、自分よりむしろ身近な他者に
よって了解されるのかもしれない。

「私と あなた のあたりまえ」

朝、アラームの音に目を覚まし、ぐずりながら起きる
顔を洗って、すでに用意してある温かいご飯を口にほおばる
登校したら友達とたわいもないことを話し合う
勉強はいやだと言いながら授業を受ける
家へ帰って湯船につかりながら一日の疲れを癒す
変わり映えない一日を振り返ることもせず眠りにつく
これが私のあたりまえ

朝、爆撃の音に目を覚まし、怯えながら起きる
残りわずかの食料を少しずつ分け合って食べる
学校へ行くこともできず友人の無事さえわからない
勉強がしたい、でもできない
帰る家も無くなり、一日一日と疲れがたまるばかり
早く早く戦争が終わることを祈り、家族や友人の顔を思い浮べ
涙を流しながら眠りにつく
これがあなたのあたりまえ

同じ地球上で、たった一つの尊い命を持って生きているのに
住む場所が違うだけでその命の重さが変わっている
そのことを知りながら知らん顔をしている
それがあたりまえ
私とあなたのあたりまえ
世界の中のあたりまえ

これが本当のあたりまえ？

人吉1年 和田 歩ノ花

【評】わかりやすい表現で現実の深みをさらりと切り取っています。人間は自分の立つ前提を決して疑いません。前提は失敗によってむしろ強化されます。あたりまえを疑える人こそ詩人なのかも知れません。

入選

「雨あがり」

雨あがりが好きだ

さつきまで雨を降らしていた雲

その隙間から光が差す瞬間が好きだ

道にできるおつきな水たまりも好きだ

世界が反転して見える

もしかしたらもう一つの世界があるのではないか

そう思わせるほどに美しい

雨あがりの空気が好きだ

少しの湿っぽさと生ぬるい温度

肌にまとわりつくような空気感

あの何とも言えない感じが好きだ

雨あがりの景色が好きだ

雨に濡れた木々は

眩しいほどにその葉を輝かせている

電線の間に来たくもの巣にも

宝石のように雨粒が光り輝いている

幻想的で

それでいてどこか寂しさを感じさせる

そんな雨あがりが好きだ

球磨中央2年 毎床 にいな

「幸せ」

その大きな車で

ミサイルではなく本を飛ばせられたら

その飛行機で

爆弾ではなくチョコレートを降らせられたら

あの人

銃口ではなく花束をかかげてあげられたら

どんなにまぶしい世界なのだろう
どんなに明るい未来なのだろう

朝起きてみんなで囲む朝食

いってらっしゃいと送り出す背中

遅刻していないか心配する親心

愛情のこもった弁当

友人と過ごす放課後

明るく照らされる玄関

こんなにも素晴らしい日々

誰もが送りたいはずなのに

本当にしてあげたいことって

本当にされたいことって

何だろう

本当は

本当は

みんな知っているはずなのに

人吉1年 高山 心陽

「変わっていた景色」

とぼとぼと歩いた道

小学生以来歩くことが少なくなった道

久しぶりにゆつくりと見る景色は

昔見ていた景色とはガラリと変わっていた

草がぼうぼうと生い茂った土地

新しい家が建った土地

売りに出された土地

これらは全て元々は田んぼだった

うるさいほどに聞こえていた

カエルの鳴き声は

今はもう聞こえない

小さい頃によく捕まえて遊んでいた

おたまじゃくしは

今はもういない

新しい家が建つようになったのは
もうずっと前のことなのに
今更このことに気がついた

他にも私が気付かないうちに
何かが無くなり変化している
そう考えると

自分の周りのことに興味がわき
少し怖くもなった

球磨中央2年 寺田 美佳

「難しいもの」

今日も暇だったからスマホを手を取った

ユーチューブを開いた

検索欄の見たかった人の名前の横には炎上の文字

その人が悪いことをしたのかもしれないけど：

なんとなく気分が落ちてしまつてユーチューブを閉じた

ティックトックを開いた

動画のコメント欄では投稿主の粗探し大会が始まっている

私はいい動画だと思つたのだが：

なんとなく心が苦しくなつてきてティックトックを閉じた

グーグルを開いた

まず目に入るのは芸能人のゴシップニュース

調べたいことがあつただけなのに：

なんとなく悲しくなつてグーグルを閉じた

SNSは批判や噂であふれかえっている

顔が見えないからいいのか

有名な人なら何を言われてもしかたないのか

そんなはずないだろう 誰でも知っていることだ

でも この詞も誰かを批判していることに変わりない

言葉は人の心はなんて難しいのだろう：

人吉1年 米岡 沙希

「ヒトカケラ」

思い出は 電車のシートに置いてきた
リュックをせおった友の顔は
向日葵のように、大きく咲く
ああ、愛おしい
親指と人差し指で丸をつくってみる
虫眼鏡でも、ラムネ瓶のビー玉でも見えない
そこから見える景色は、きつと、

思い出は 浮き輪の中に置いてきた
泡沫(うたかた)の君はキラキラ光る海に浸かる
濃くなつたセーラー服と、赤らめるほほ
ああ、愛おしい
両足を広げ体を下に曲げてみる
逆立ちしたつて、空から落下したつて見えない
そこから見える景色は、きつと、

そびえ立つ大きなわたあめは
時折甘い涙をながす
濡れて帰つて怒られても、泥まみれになつても、
いいのだ、それで、

おもいでを フィルムにやきつけた
もちろん、どこかに置いてきたつていい
でも僕らはこの人生(ものがたり)に“ピリオド”をはつけない
何度でも“コンマ”にかえてやろう

ああ、夏の匂いがする

人吉1年 迫田 さくら

努力賞

「拝啓 空の上の貴方へ」

暑い日が続いていますね
お元気ですか
この前 貴方に会いに行きました
空から会いに来てくれたかな

貴方はこの世から
しゃぼん玉が消えるみたいに
急に居なくなりましたね

私は未だに実感が湧かず
涙を流すときがあります

貴方は勉強を教えてくださいました
貴方は一緒に遊んでくれました
貴方は「またね」といつてくれました

私は最期のお別れを
直接言えなかった

私はあの日
テストを受けた
学校を休まなかった

あの日私は
貴方に会いに行くべきだった
貴方の少ない写真を見る度に
後悔を思い出す

ああ
あの日 貴方に最期のお別れを言いたかった

「展望」

突き抜けるような天色の青空を仰ぐ度
重くのしかかった憂鬱すら
あの青に吸い込まれて行って
私はどこまでも 自由であるような気がした

駆けだしてしまおうか
あの輝かしく自由な青へ
そうして高く 高く跳ぶのだ！
何もかもを振り払うように！

そうでなければ 私は

机上のノートに広がる朱殷色に
沈んでしまいそうだから…

濟々巒3年 南 佑月

「僕は嫌だ」

今戦争が起きている
戦争を仕掛けた国は非難され
仕掛けられた国は擁護される
戦争に正義などない
どんな理由だとしても
なぜなら
別の道が必ずあったはずだから
それなのに
どっちが正義だどっちが悪だ
皆対岸の火事としか思っていない
そんな世の中
僕や嫌だ

熊本商2年 宮本 昂輝

「部活の遠征」

今日はホテルで初めてのひとり部屋
僕はホテルのお風呂に入っていた

トントントン
外からノックされる音が聞こえた
僕は怖くなって浴そうに身を潜めた
ドンドンドン
さっきより大きめの音が聞こえた
僕はもっと怖くなった
ブーブー

さっきと違う音が聞こえた
僕はもっともっと怖くなったけど
外の様子が気になった
急いで着替えた

ドアの外をのぞいてみると
大勢の先生たち
僕はお風呂に一時以上入っていた
ご心配をおかけしてすみません

盲学校1年 西嶋 涼太

「ありがとう」

祖父の手は冷たかった
今までで一番辛かった
今までで一番悲しかった
今までで一番泣いた
泣いて泣いて後悔した
ありがとうが言えなかったことを

球磨中央2年 深水 叶

「空」

見上げた空は
輝く青色だろうか
それともくすんだ灰色だろうか
空を眺めて想うのは
明日への希望だろうか
それとも果てしない戦いへの絶望だろうか
みな同じ空の下で生きているはずなのに
どこから空を見上げるかで
空は光にも影にもなってしまう
私たちは願い続けている
同じ空をみて
ともに笑い 輝ける世界の実現を
私たちは探し続けている
表情をなくした空を
青く染める方法を

人吉1年 中村 光彩

「青空から夜空まで」

空高く、見上げると

青い天井のように広がっている
時間がたち
青い空からオレンジ色へと徐々に染まり
グラデーシヨンのようになっていく
さらに時がたち
青空がオレンジ色に広がり、そまっっていく
オレンジ色は、最後は黒い闇へと
ゆっくりと徐々に広がり
最後は暗い天井に
光を一つ一つ照らしていく

ひのくに高等支援3年 中山 慶司

「世」

みんな違う
肌も顔も体も
みんな違う
性別も夢も住らしも
でも暮らせるはず、仲良く平和に
自分と違う誰かは悪じゃない
みんな自分を守りたい
でも周りを思いやる、分かっているけど難しい
自分を押しつけない、だって、
僕にとつての幸せは、
誰かにとつては不幸せになりうるかもしれないから。

芦北1年 村木 瑛海

【総評】高校生の詩人の作品を読みながらしばしば感じることもある。授業という決まりごとで書かされているものも含めて、内的な必然によつて紡がれた作品はいつも詩の良しあしを超えて読者に迫ってくる。真つ青な空、片思いのやるせなさ、愛する家族との別れ。どれをとつてもその純粹で痛切な思いは詩歌の本質に立ち返らせてくれる。戦争、コロナ禍、多発する災害などは詩人たちの心にも影を落とさざるを得ない。ある作品では、戦争を仕掛けた方も仕掛けられた方にも、別の道があつたはずだと言い「戦争に正義などない／どんな理由だとしても」と書いている。作者は偏りがちな情報の洪水の中で、戦争というものの本質を見定めようとしている。また「祖父の手は冷たかった」で始まる短詩も印象的。生前に「ありがとう」と言えなかつたことを、泣いて後悔したという、作品にもなり難いほどの率直さが、逆に胸に響く。この内発性をどう表現するかは表現の永遠の課題である。(内田良介)

【肥後狂句部門】

最優秀賞

熊本が好き 七変化する阿蘇の峰

盲学校2年 田中 桃華

【評】熊本が誇る阿蘇は雄大なだけではなく繊細な美しさも合わせ持っている。四季折々、朝な夕なに表情を変ええる阿蘇の美しさに思いを馳(は)せ、それを七変化と表現したことにこの作品の素晴らしさがある。(鳴神)

優秀賞

もう大人 より良い国へ一票を

城北3年 長塩 幸奈

【評】混迷の世の中を思うと、世界も日本もどうなっていくんだろうと漠然とした不安があります。十八歳で選挙権を得た作者の、一票を投じる気構えを感じ頼もしく思います。政治家に読んで欲しい一句ですね。(本来狂句では使えない「を」もこの句では良しとしました)(下田)

熊本が好き 去った地元にUターン

球磨工2年 塚本 楓哉

【評】進学や就職で熊本を去る。その地で頑張っているけれど、ふつふつと湧いてくる懐かしい故郷への思い。地元には家族がいる、友人もいる。熊本が待っています、帰って来いと。(下田)

ヤッタネ 流れる汗に掛ける声

熊本商2年 田添 瑞季

【評】スポーツの場面であろうか、友、ペア、チームメイトのがんばった姿を心から讚(たた)える爽やかさが伝わってくる。ハイタッチでもしているような光景が目に見えかぶ良い句である。(鳴神)

ヤッタネ あの子の心わしづかみ

球磨工1年 立野 龍輝

【評】学業で？部活で？それとも君の優しさに？何しろあの子が自分の方を向いてくれる嬉(うれ)しさが弾けるようで、リズム感が心地良い句です。ヤッタネ に思わずヨカッタネ と言ってしまいそうです。(下田)

ヤッタネ 涙ながらのVサイン

城北2年 河上 凌

【評】苦しかった練習の成果が出て、見事な勝利を収めることができた。誰はばかりのことのない涙、そしてVサインである。高校生らしい身近な場面を切り取り、的確に表現できている。(鳴神)

入選

もう大人	ピカピカ光る選挙権	芦北支援3年	馬場崎 恵
もう大人	さらば幼きわが心	黒石原支援3年	渡辺 穂佳
もう大人	都合悪いと「まだ子供」	人吉2年	大内山 紗希
ヤツタネ	資格取得で第一歩	球磨中央1年	上米良 昊慎
熊本が好き	どぎやんなってもここがよか	熊本商3年	上垣 千佳

努力賞

もう大人	ばってんたまに甘えたか	城北2年	牛島 凜
ヤツタネ	三年間の無欠席	城北3年	松本 夢叶
もう大人	父が小さく見えてきた	熊本商2年	石橋 直樹
もう大人	投票用紙私宛	芦北3年	村上 正道
ヤツタネ	修学旅行あるってよ	熊本商2年	山口 華花
もう大人	気づけば祖母が見上げてた	球磨中央1年	立場 日菜
熊本が好き	帰りたくなる街景色	高森3年	下田 雅翔
もう大人	帰省した兄変わったな	第二1年	葉玉 智彩
ヤツタネ	麦わら一味勢揃い	第二1年	川瀬 理乃
もう大人	子どものままでいたいのに	熊本商2年	野村 杏珠

【総評】肥後狂句という馴染みの薄い分野に今年もたくさんの方の応募をいただきました。肥後狂句は「笠付け」と言って、「笠」の後に十二音で「笠」にまつわることを表現してつくりまわす。人と同じようなことを表現しては良い句として評価されません。「笠」を理解し、「笠」を掘り下げ、「笠」を広げることが大事です。応募作品の中にキラリと光る発想がたくさんありました。見たこと、聞いたこと、考えたこと、体験したことなど自分の身近なことを思い浮かべてください。それを肥後狂句のルールに則り、どう表現するかによって作品の良し悪(あ)しが決まります。残念ながら、字余り、字足らず、「笠」が頭がないなど、基本的ルールが守られていない句も多く見られました。今回は一、二年生の応募がたくさんありました。今年の経験をもとにした皆さんの素晴らしい句に来年出合うことを楽しみにしています。(鳴神景勝)

前回よりも少なくなったとはいえ1751句もの投句を頂きありがとうございます。高校生らしい感性や暮らしぶりを詠んだ句に出合えるのは選者の醍醐味です。

ただ、昨年も書きましたが、肥後狂句の決まり事を多くの皆さんが承知していないのではないかと思われまます。

肥後狂句は「笠」二頭に来る言葉二に十二音で句を付ける文芸です。十二音は厳守です。しかし今回も字余り、字足らずの句が多く、基本を守っていればもつと

いい句になるのにと、とても残念でした。

次に合句、類句。「熊本が好き」では水、空気がおいしい、自然・人情が豊か、くまモンが可愛いなど。「もう大人」では十八歳で得た選挙権に関すること、大人でも子供でもなく揺れる心など。この二笠は類句が多く、選句に悩まされました。

できるだけ人と違う場面を見つけ句を作ること。十二音は絶対守ること。この事を肝に銘じて句を作ってみてください。きっといい句が生まれると思います。期待しております。(下田民子)